

聖書：創世記 11：1～9

説教題：バベル

日時：2023年6月4日（朝拝）

前は創世記 10 章のいわゆる「民族表」と呼ばれる章を読みました。大洪水後の 9 章 1 節で「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と言われた神の祝福の言葉を受けて、ノアの息子、セム、ハム、ヤフェテからどのように人々が地に増え広がって行ったかが記されました。その 10 章には分かれ出た人々の間に色々な言語があったことが記されていました（5 節、20 節、31 節）。なぜ一つの家族から人類は分かれ出たのに色々な言語が存在するようになったのか、そのことを説明しているのが今日見る 11 章 1～9 節です。

1 節に「さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった」とあります。人々は東の方へ移動してシンアルの地に平地を見つけて、そこに住みました。シンアルという地名は 10 章 10 節に出て来て、その欄外注を見ると、すなわち「シュメール」とあります。つまりあのティグリス、ユーフラテス川に挟まれたメソポタミアの地域のことです。その人々は 3 節で「さあ、れんがを作って、よく焼こう」と言っていて、「石の代わりにれんがを、漆喰の代わりに瀝青を用い」ました。平地では石が手に入らなかったのでしょうか。そこで彼らはれんがを作りました。このれんがを建材として用いたのはメソポタミア文明の特徴の一つだったようです。彼らは自分たちが置かれた環境の中で、自分たちの生活をより良くするための工夫をし、文化を発展させて行きました。その彼らはさらに「さあ、われわれは町と塔を建てよう」と言ったことが 4 節に書いてあります。このこと自体は問題のないこと、良いことと言えます。

しかしこの記事をよく読むと、このように語り合った彼らの思い、動機、また目的には問題があったことが分かって来ます。まず彼らは「天に届く塔を建てよう」と言いました。「天に届く塔」とは単に「高い塔」のことではありませんでした。「天」は神の住まいを象徴します。ですから「天に届く塔を建てよう」という言葉の意味は、神の領域に入ろう！ということです。神に到達しよう！ということです。何のためでしょうか。神に近づき、神を敬い、神を礼拝するためでしょうか。そうではありませんでした。彼らは「町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう」と言いました。つまり自分たちがすごい者たちであることを示そう！ということです。今やこんなに

素晴らしい技術を持つに至った我々である。その我々は神より優れた者たちとなったことを証明しよう！我々自身が神の場所に上ろう！我々が神になろう！ということです。4節の前半に出て来る「自分のために」という言葉も、彼らの人間中心的な思想を表しています。

その彼らは4節最後で「われわれが地の全面に散らされるといけないから」とも言います。これは9章1節の「生めよ、増えよ、地に満ちよ」と言われた神の御心に対する反逆なのでしょうか。彼らはとにかくこのプロジェクトのために我々は一致しよう！一致団結しよう！と呼びかけます。人間の力を結集して神に挑戦しよう。神に追いつき、そして我々自身が神になろう！と。これはまさに最初の人間アダムの罪と同じです。彼もサタンの誘惑を受け、高ぶって神の上へのし上がろうとして、あるべきところから落ちました。その罪がまたここに現れて来たということです。大洪水のさばきによって一旦この世界をきよめても、そこにある人間の本质は変わらないことがこのように示されています。

そしてこれは今日の私たちの姿を映し出す鏡のようなものでもあるのではないのでしょうか。人は墮落後も神のかたちであると9章6節で言われました。人間は人間である限り、神の素晴らしさを反映する特性を与えられて、この世に存在しています。それはその人が信者か未信者かとはある意味で関係ありません。以前、創世記4章で見ましたように、カインの子孫にも素晴らしい文化の発展が見られました。しかしそこに往々にしてあるのは高ぶりです。今や我々は神が不要な者たちとなった。見よ、自分たちはこんなにも素晴らしい技術を持っている。見よ、自分たちはこんなにも進歩、進化を遂げている。この素晴らしさをもって、自分たちは上に上り、自分たちの名をあげよう。今や我々こそ神に代わってすべてを支配する者たちであることを示そう。そのような自己宣伝、自己高揚、自己礼賛の態度が今日の私たちの文化を特徴づけていることはないのでしょうか。

これに対して神はどのように行動されたでしょう。5節に「そのとき主は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた」とあります。ここには大いなる皮肉があります。人は自分たちが建てている塔を見上げて、「どうだ。我々はいよいよ天に届こうとしている」と誇らしい思いで一杯だったかもしれませんが、神はそれを見るために降りて来なければなりません。つまり神の御住まいである天からは良く見え

なかったということです。降りて近づかないと良く分からない。それほど神の前ではちっぽけなものでしかないということです。私は以前、長老教会代表として韓国の教会に問安に出かけた際、飛行機で長野県の日本アルプスの上を通ったことがありました。あの高い山々はどんな風に見えるだろうかとワクワクしながら窓から眺めたところ、何とそれは地面にはいつくばっている単なるしわのようなものにしか見えなくて、逆にびっくりしました。地上から見ると勇壮に見える山々が、上から見ると単なる地面のひだひだ。良く目を凝らさないと他の場所との違いが分からないようなものでしかない。同じように私たちが何かを誇っても、神の前ではその程度のものでしかないことを思わされます。

そして主は言われました。6節：「見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない。」このままにしておくなら彼らをとどめることはできない。そこで彼らのしていることをやめさせよう！と言われます。7節：「さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」主はすでに降りて来られていましたが、さらに降りて行かなければなりません。さらなる皮肉です。この結果、町と塔を建てる彼らのプロジェクトは頓挫させられます。彼らは突然、互いの話し言葉が通じなくなり、彼らは一致協力して活動することができなくなりました。間もなく我々は天に到達できるだろうと自信満々だった彼らの目論見はもろくも崩されました。主の御心にかなわない人間の計画はみなそうです。箴言 19 章 21 節：「人の心には多くの思いがある。しかし、主の計画こそが実現する。」詩篇 33 篇 10 節：「主は国々のはかりごとを破り、もろもろの民の計画をくじかれる」人間がどんなに用意周到に準備し、知恵と力を結集して事に当たっても、主は瞬時にそれを終わらせることができるのです。人々は互いに分裂し、あっという間に工事はストップ。地の全面に散らされることとなりました。

9 節に「それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた」とあります。興味深いことは、アッカド語ではこの町の名はバブ・イリで、「神の門」を意味したことです。神の門、すなわち神に近い場所。天の領域とつながり、そこに入って行くための入口。しかしバベルという言葉はヘブル語の「混乱」を意味する言葉との関係でここで説明されています。ここは人間が神の位置に上るための場所と言うより、神が人間の企てを打ち壊された場所。神の領域へと行って行くための輝かしい場所と言うより、大混乱が発

生し、人々がそこからバラバラに散らされた場所であると。

以上の箇所を私たちはどのように読むべきでしょうか。これは高慢な人間たちの鼻を神がへし折られたという記事なのでしょう。天というご自分の領域を不法侵入されそうになった神が慌てて怒り、人間どもに罰を下した記事として読めば良いのでしょうか。確かに人間の計画を神が壊されたという意味でさばきと言えます。それによって人々が互いに通じ合えなくなったこともさばきの結果と言えます。しかしそのように見るだけでは十分ではありません。神はどんな心でこのことを行われたのでしょうか。6節で主はこう言われました。「見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない。」 「不可能なことは何もない」とあるのを読むと、神が人間に脅威を覚えて彼らの企てをくじかれたと読みたくなるかもしれませんが、神にとって脅威となるものは何ともありません。もし本当にそう思うのなら、こんな人間など滅ぼしてしまえば良かった。しかし神のしたことは彼らの言葉を通じないようにしたことです。これは良く考えれば随分と軽いさばきなのではないでしょうか。ではここに神はどういうお心を持っておられたのでしょうか。この6節の言葉とよく似た言葉遣いは3章22節に見られました。アダムとエバをエデンの園から追い出す際、神である主はこう言われました。「見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」 神はアダムとエバがいのちの木から取って食べると、ご自分にとって困るから、あのようにされたのではありませんでした。罪に墮ちた状態でいのちの木から取って食べ、救いを得ることができなくなることがないように、そのことを心にかけて、いのちの木への道を閉ざされました。今日の箇所も同じと考えられます。彼らがこの調子で罪を結集して限度を超え、取り返しのつかない災いを自らにもたらすことに至らないように神は心を配られた。そのまま放置すれば、その罪はいよいよこの世界に大きな力を発揮し、もはやこの世界を滅ぼす以外、道はないという状態になってしまう。その状態を回避するため、神は彼らの言葉を混乱させ、彼らが悪においてこれ以上、一致することがないようにされたのです。いわば罪を細分化して、その勢いを削ぎ、その力を抑制する方向へと導かれたのです。なぜでしょうか。それはこの世を保つためです。創世記9章で見た洪水後ノア契約と同じです。神は二度と同じような洪水のさばきによって地を滅ぼすことはせず、この世界を保持すると約束くださいました。それはなぜかとさらに問うなら、それは創世記

3章15節に示された原始福音、最初の福音の約束を神が心に留めておられるからに他なりません。神はやがて女から出る一人の子孫を通してこの世界を救うと約束くださいました。その約束の実現に向かって、なおこの世界が存続するように、人々の罪が積み重なって限度を越すことがないように神は取り計らわれたのです。

ですから今日の記事に続いてアブラハムに至る系図が記されることになります。神はただこの世界を保っておられるのではありません。神がそうされるのは救いの約束を実現させるためです。その約束を担うことになるアブラムの選びのことがこの後、記されます。そしてその神の働きはやがて約束のメシア、イエス・キリストによる救いを提供することへと至ることになります。

この日、人々の言葉はバラバラにされ、互いに通じることができない者とされましたが、旧約の預言者は、やがて神の恵みにより、このことへの癒やしが与えられ、人々が心を一つに合わせる時が来ることを語りました。ゼパニヤ書3章9節：「そのとき、わたしは諸国の民の唇を変えて清くする。彼らはみな主の御名を呼び求め、一つになって主に仕える。」 その預言はペンテコステの日に最初の成就を見ます。使徒の働き2章4節：「すると皆が聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、他国のいろいろなことばで話し始めた。」 そしてその預言の最終的成就がヨハネの黙示録7章9～10節にあります。「その後、私は見た。すると見よ。すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。彼らは大声で叫んだ。『救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。』」 ここにあらゆる言語を話す人々が一つとなって主を賛美している光景が描かれています。バベルの事件以降、異なる言語は人々が一つになるための壁となりましたが、やがての日には主を信じる者たちが言葉の壁を越えて、神と子羊キリストを心一つとなって賛美するこの上ない幸いな日が来ると言われています。

今日、私たちの世界の言葉は様々に分かれています。最近では色々な翻訳ソフトが手に入って随分便利になって来たとは言え、意思疎通をする上ではやはり困難があります。不便だなと思います。また言葉の違いは民族の違いともセットになっていて、異なる民族同士はなかなか互いを理解し合えません。むしろ今日私たちは民族同士が益々互いに敵対的になっている様子を見ているのではないのでしょうか。なぜこうなの

か。私たちは今日の箇所、これは人間の傲慢に対する神のさばきなのであるということを知ります。またそれとともに、神はこうして悪が一つに固まることのないようにしておられるという恵み深い御心があることを見ます。しかしこれが最後の状態ではありません。私たちは今、キリストを信じ、キリストにあって、言語や民族の壁を越えて、心をつなげてともに歩むことができる幸いを味わい始める者たちとされています。そしてやがてすべての言語を持つ者たちの間に、この癒しと祝福がキリストにあって完全に実現すると聖書は約束しています。私たちはこの神の御心に感謝し、私たちの罪にもかかわらず、なおその救いのために働いてくださる神のお姿を、創世記の続く記事に読んで神を礼拝したいと思います。そして今やキリストにあってあらゆる言葉を話す人々と一つにされ、心を合わせて神をほめたたえる幸いに生かされ、またこの素晴らしい福音を人々に宣べ伝え、神の御心になるために仕える神の民の歩みへ導かれたいと思います。